様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 ２２ 日現在

機関番号：１３９０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｈ０３４４６

研究課題名（和文）道徳意識の生成・共有・創発過程：個人と文化の動態的関係の解明

研究課題名（英文）The process of generation, sharing, and emergence of moral judgments: An investigation of the dynamic relationship between individuals and culture

研究代表者
唐沢　穣（KARASAWA, Minoru）

名古屋大学・情報学研究科・教授

研究者番号：９０２６１０３１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　11,970,000円

研究成果の概要（和文）：道徳判断に関わる個人レベル、集合レベル、文化レベルの異なるレベルでの過程を明らかにした。個人内過程として、感情の他に「動機づけられた推論」の影響が示された。すなわち、行為の道徳性を意図性や人格、さらに事象の因果性に至るまでの広範な推論に適用する過程が明らかになった。集合レベルでは、ソーシャルネットワークを通じて道徳関連語彙が伝搬・拡散を繰り返し、政治的イデオロギーなども関与するマクロ現象をもたらす過程が明らかになった。危害・擁護を特に重視する個人レベルの傾向が集合レベルで創発するという相似性も示された。道徳的判断や信念の文化的共有については、通文化性と文化的固有性がそれぞれ特定された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
近年、急速に発展した道徳判断研究の分野に、計算社会科学や文化心理学など異なる研究アプローチとの学際的協働の可能性を拓いた点が最も重要な意義である。日本語版道徳基盤辞書や状況サンプリング法といった研究ツールや手法の提供に加え、理論的に新しい観点の導入をもたらした．特に、道徳判断が行為者の意図性や道徳的人格など属人的性質、さらにはそれが関与する事象の因果性といった、広範な推論を喚起するという知見は、認知・感情といった基礎過程に関する心理学的研究分野だけでなく、法学や倫理学など、さらに他分野に対しても示唆に富むものと言える。文化班の研究結果は、日本社会に特有な道徳観について検証を続ける必要を示した。

研究成果の概要（英文）：Psychological processes concerning moral judgments operating at individual, collective, and cultural levels were respectively examined. Analyses of the intra-individual processes revealed the role of emotions as well as that of "motivated reasoning" pertaining to a wide range of inferences concerning intentionality, moral characters, and causality of an unwanted event. At the macro level, computational modeling and social media analyses revealed emergent processes through which morally laden words are spread across a wide network involving political ideologies. The notably significant role of harm/care moral foundation was observed in a manner analogous to individual level judgments. Cultural-psychological analyses revealed both relatively universal and culture-specific aspects of moral judgments.

研究分野：社会心理学

キーワード：道徳判断　道徳基盤　感情　二重過程　文化　イデオロギー　身体性

１．研究開始当初の背景

近年、道徳判断に関する社会心理学研究が急速な発展を見せているが、その基礎にあると考えられる感情と認知の相互関係については、不明確な点が依然として多い。また、道徳判断の普遍性と文化固有性の相互関係についても、検証が不足している。さらに、ソーシャルネットワーク等において伝搬・拡散する情報には道徳に関連するものが極めて多いが、こうしたマクロなレベルでの集合現象において、道徳判断がどのように創発するかについては、ほとんど調べられていないのが、開始当初の実情であった。

２．研究の目的

以下の３つの研究班を構成し、上記の未解決も問題の解明に取り組んだ。

(1)　ミクロ班

主に個人内の認知・感情過程の特質を明らかにすることを目的とした。まず感情過程については、道徳基盤理論（Haidt, 2012）などで議論されている、「危害」と怒り、「純血」と嫌悪といった、道徳基盤と特定の情動との対応関係があるのかどうかを、道徳基盤質問紙（Moral Foundation Questionnaire）の内容に関する再検討とも併せて行った。

高次の認知過程に関する検討としては、道徳的に望ましい行為・望ましくない行為のそれぞれについて、意図性の認知が対応推論過程を喚起し、行為でなく人格について判断を促す過程について実験的検証を行った．また、人格的道徳性において劣る人物の規範逸脱行為には、高道徳性人物と比べて、事象の原因として推論されやすい有責因果性（culpable causation）の判断をめぐって､その中核的要因と考えられる反実的推論の役割について実験的検証を行った。

また、道徳判断の身体性に関する検証として、顔認知における道徳判断の自発性と自動性、さらにはこれと関連するパーソナリティー変数などについて検討を行った。併せて、身体反応の計測技術の開発として、眼球運動の計測と道徳判断を関連付けることを試みた。

(2)　マクロ班

計算社会科学の方法を用いて、Twitter の内容分析を元に、道徳関連語の伝搬・拡散過程を吟味した。

(3) 文化班

Shweder（1990）が指摘した「自立」「共同体」「神聖」の三大倫理の通文化性と文化固有性の双方を、状況サンプリング法などの文化心理学的手法を用いて検証した。また、日本社会に特有な道徳基盤の新たな可能性として､「勤勉」が倫理性を持つ可能性についても、社会調査と実験的方法を併用することによって検証を行った。

３．研究の方法

(1) ミクロ班

・感情過程の分析を目的として実験研究では、道徳違反シナリオを呈示して、刺激人物の道徳的特性に関する情報を操作し、併せて公正世界信念などにおける個人差変数との関連を調べるという手法を採った。併せて、特定の道徳基盤を活性化させることによるプライミング手続きにより、道徳判断における直感的および熟慮的の二重過程について分析した。

・道徳的対応推論過程の検証においても、道徳遵守および道徳違反行為をシナリオを用意し、それぞれにおいて目的を達成した作為シナリオと、達成し損ねた不作為シナリオに対する道徳判断を比較することにより、意図性の有無が人格判断に与える影響を分析した。媒介変数として、義憤など道徳感情と、人物の傾性に関する診断性認知の影響を分析した。

・反実的推論過程の分析では、高道徳性、低道徳性それぞれの人物が、日常的な行為または非日常的な行為の選択が加害行為に帰結したというシナリオを用意し、反実仮想の過程を直接的に測定することによってその媒介的役割を分析した。

・身体性の検証では、信頼性などの道徳的特性が顔つきに身体化して現れるという「人相信念」を測定するための尺度を開発し、公正世界信念など他の個人特性との関連を分析した。日米でオンライン調査を実施し、文化的要因も考慮できる方法を採用した。

（2）マクロ班

まず、道徳基盤研究で用いられる語彙データベース「道徳基盤辞書」の日本語版を、機械学習とテキストマイニングの方法を用いて開発した。また、道徳遵守および違反に関わる道徳基盤関連語と、イデオロギー態度的な含意を持つ語との共起関係を分析することにより、英語圏で報告されてきた道徳判断の政治性が、ソーシャルメディア上でも観察されるかどうかを調べた。さらに、道徳判断を基準に社会的分断が起こる過程をエコーチェンバー現象として捉える観点から、その計算モデルについてシミュレーションを用いた比較を行った。

(3) 文化班

・状況サンプリング法を用いた研究では、まず第一段階として日米で三大倫理のそれぞれについて違反状況の記述を多数収集し、次に第二段階では自国・他国で生成された違反行為の中から抽出された行為記述について非道特性の判断を求めた。他国生成の記述よりも自国生成の方がより厳格に判断されるという文化適合性仮説を検証した。さらに、第一段階で各倫理の前提かで生成された違反行為が、当初意図された倫理ドメインにどの程度性格に帰着されるかを指標に、道徳違反に関する文化的共有性の程度を検証した。

・勤勉に関する検証では、5 つの道徳基盤に加えて勤勉の遵守・違反シナリオを作成し、それ

ぞれに対する（非）道徳性判断と政治的イデオロギーや公正世界信念などとの関連を調べた。

４．研究成果

(1) ミクロ班

・感情分析では、公正世界観の高い者は違反者の普段の行動に拘らず否定的に評価し、その責任性を高く知覚したが、公正世界観が低い者においては普段の行動が悪い者に対してより一層責任帰属を高める傾向が見出された。これは以降の対応推論過程や有責因果性判断と密接に関わると考えられる。また、擁護または公正のいずれの基盤を活性化させるかによって、曖昧画像に関する解釈が変化し、しかもそれが公正世界信念などとも関連する可能性が示唆された。

・対応推論については、遵守行為の不作為よりも、違反行為の不作為の方がより道徳判断に反映しやすい当結果が得られ、意図の推論がネガティブ事象について特に起こりやすいという非対称性が認められた．さらに、感情はポジティブ・ネガティブの両方について道徳判断を媒介するが、人物特性の診断性という認知的な推論過程は、ネガティブな意図に関する道徳判断だけを媒介することが明らかになり、ここでも非対称性が見られた。

・高道徳性人物が望ましくない結果（交通事故）の加害者となった場合、非日常性情報が喚起する反実仮想が原因推論を引き起こすのに対し、低道徳性人物の同じ帰結については、その人格そのものに対する mutation が起こることが明らかとなり、望ましくない人物そのものを社会から除外しようと考える義務論的な推論過程が原因推論にも影響する可能性が示唆された。

・「人相学的信念」研究では、日米の双方でその存在が確認され、また特性が生物学的に決定されるという本質主義信念や、公正世界信念との関連が、いずれも通文化的に示された。

・並行して行った眼球運動計測の手法開発も一定段階に達し、今後の研究におけるツールを提供できたという成果を得た。

(2) マクロ班

エコーチェンバーの計算モデルに関するシミュレーションでは、モラル・ディバイドの生じる条件を検討した結果、社会的影響と社会的切断の両方がある条件でのみ、イデオロギーの偏極とソーシャルネットワークの分断が起こることが示唆された。また、複数のビッグデータを道徳基盤理論の観点から分析した結果、5 つの道徳基盤のうち、擁護基盤が最頻出することや純潔基盤が他の 4 つの基盤と異なることが、Twitter のデータだけでなく、Google ニュースのデータでも確認された。さらに、道徳基盤辞書を日本語に翻訳した J-MFD を MIT ライセンスで公開した。道徳判断に関する社会心理学的研究と、ソーシャルメディアを分析対象とする計算社会科学の手法とを統合した試みが多くの発表等に至ったことは、本研究において最も重要な成果のひとつであった。

(3) 文化班

・状況サンプリング法研究では、日米を通じて共同体の倫理について、文化内の共有理解の程度が最も高いことが示された。自立倫理違反については、自国産の記述が必ずしも共通理解に至っているわけではなく、また神聖倫理違反ではアメリカ産の記述の方がその違反性をよりより理解されやすいなど、各倫理ドメインのもつ文化固有性が示唆された。

・勤勉研究では、少なくとも日本人においては政治的保守性と非道徳性判断が関連するほか、公正世界信念との関連が見られるなど、道徳基盤としての性質を持つことが示唆され、今後さらに多くの研究へと至る多くの示唆が結果から得られた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　8　件）

1. Karasawa, M., Asai, N., & Hioki, K. (2019). Psychological essentialism at the explicit and implicit levels: The unique status of social categories. *Japanese Psychological Research*, **61**, 107-122. DOI: 10.111/jpr.12246. 査読あり
2. Matsuo, A., Sasahara, K., Taguchi, Y., & Karasawa, M. (2019). Development and validation of the Japanese Moral Foundations Dictionary. *PLOS ONE*, **14**(3): e0213343 DOI: 10.1371/journal.pone.0213343.　査読あり
3. 柳学済・堀田美穂・唐沢穣（2018）外集団成員との相互作用の予期が集合的罪悪感に与える影響　実験社会心理学研究, 58(1), 45-52　査読あり
4. 小林麻衣・堀毛一也・北村英哉（2017）学業場面における誘惑対処方略の有効性の検討　心理学研究,88,525-534.　DOI: https://doi.org/10.4992/jjpsy.88.16005　査読あり
5. 北村英哉（2018）感情と多面的思考，認知欲求が動画広告の説得効果に及ぼす影響 ：TV ショッピングの速い／遅い動画を用いて．関西大学心理学研究, 9, 21-34.　査読なし
6. Suzuki, A., Tsukamoto, S., & Takahashi, Y. (2017). Faces tell everything in a just and biologically determined world. *Social Psychological and Personality Science.* Online first published on October 13, 2017. DOI: 10.1177/1948550617734616　査読あり
7. Teymoori, A., Jetten, J., Bastian, B., Ariyanto, A., Autin, F., Ayub, N., Badea, C., Besta, T., Butera, F., Costa-Lopes, R., Cui, L., Fantini, C., Finchilescu, G., Gaertner, L., Gollwitzer, M., Gómez, Á, González, R., Hong, Y-y., Jensen, D. H., Karasawa, M., Kessler, T., Klein, O., Lima, M., Mähönen, T. A., Megevand, L., Morton, T., Paladino, P., Polya, T., Ruza, A., Shahrazad, W., Sharma, S., Torres, A. R., van der Bles, A. M., &

Wohl, M. (2016). Revisiting the measurement of anomie. *PloS ONE*, **11**(7): e0158370. DOI:10.1371/journal.pone.0158370　査読あり

8. 田中友理・宮本聡介・唐沢穣（2016）ステレオタイプ情報はよりリツイートされるか？ −ツイートの言語表現に注目した検討−　人間環境学研究, 14 (2), 165-170. https://www.jstage.jst.go.jp/article/shes/14/2/14_165/_pdf　査読あり

〔学会発表〕（計 39 件）

1. 松尾朗子・笹原和俊・田口靖啓・唐沢穣（2018 年 9 月）Moral Foundations Dictionary 日本語版を用いた道徳違反単語数の日米比較　日本心理学会第 82 回大会，仙台国際センター
2. Hirozawa, P. Y., & Karasawa, M. (2018, July). Accepting a request with implied rule violation: A Brazil-Japan comparison on underlying psychological processes. A paper presented at the 24th International Congress of International Association for Cross-Cultural Psychology. University of Guelph, Ontario, Canada.
3. 田口靖啓・笹原和俊（2018 年 3 月）. 日本語歌詞の道徳性：道徳基盤理論に基づくテキスト分析　第 2 回計算社会科学ワークショップ　東京
4. Kitamura, H. (2018, March). Priming of moral foundations on judgment for moral conflict task. The Society for Personality and Social Psychology. Atlanta, USA.
5. Hattori, Y., Watanabe, N., & Suzuki, A. (2017, November). Hierarchical encoding of faces may be accentuated for opposite-sex peers. 58th Annual Meeting of the Psychonomic Society, Vancouver, British Columbia, Canada.
6. 松尾朗子・笹原和俊・田口靖啓・唐沢穣（2017 年 10 月）Moral Foundations Dictionary 日本語版を用いた道徳違反単語数の比較　日本社会心理学会第 58 回大会，広島大学
7. 遠山素乃子・唐沢穣（2017 年 10 月）加害者の道徳性が因果推論に与える影響とその規定要因日本社会心理学会第 58 回大会，広島大学
8. 服部友里, 渡邊伸行, 鈴木敦命. (2017 年 9 月). 評定者と刺激の性別がチアリーダー効果に与える影響　日本心理学会第 81 回大会, 久留米シティプラザ.
9. 鈴木敦命, 塚本早織, 高橋雄介. (2017 年 9 月). 人相学的信念の背後にある素朴理論　日本心理学会第 81 回大会, 久留米シティプラザ.
10. 鈴木敦命. (2017 年 9 月). 集団は個人の魅力を高めるか：顔集合の階層的符号化. 日本心理学会第 81 回大会, シンポジウム SS-012 「アンサンブル知覚研究の最前線」（企画者: 上田祥行, 坂野逸紀), 久留米シティプラザ.
11. 笹原和俊（2017年9月). 計算社会科学で読み解く社会の「分断」. JAWS2017　招待講演 千葉県鴨川市.
12. 佐藤栄晃・北村英哉（2017 年 9 月）一対比較を用いた不幸・不運の出来事分析 日本心理学会第 81 回大会，久留米シティプラザ
13. 小田友里恵・谷井淳一・北村英哉（2017 年 9 月）心理学観を問う：TOS,IOD を用いた心理学者および臨床家においての検討　日本心理学会第８１回大会，久留米シティプラザ
14. 田中友理・唐沢穣（2017 年 9 月）被害者の属性情報が加害行為の解釈に与える影響，日本心理学会第 81 回大会，久留米シティプラザ
15. 松尾朗子・笹原和俊・田口靖啓・唐沢穣（2017 年 9 月）Moral Foundations Dictionary 日本語版の作成，日本心理学会第 81 回大会，久留米シティプラザ
16. Oda,Y., Tanii, J., & Kitamura, H.（2017, August）Psychologists' and clinicians' view of psychology. The 17th Conference of International Society for Theoretical Psychology. Tokyo.
17. Hirozawa, P. Y., Karasawa, M., & Matsuo, A. (2017, August). Asymmetries of moral character evaluation for positive and negative intention. Poster presented at the 12th biennial Asian Association of Social Psychology Convention, Auckland, New Zealand.
18. Tanaka, Y., & Karasawa, M.(2017, August).How trait information of victims influences perception of harmful acts One of the speakers in the symposium titled “Trends in the Study of Moral Judgments” at the 12th biennial Asian Association of Social Psychology Convention, Auckland, New Zealand.
19. Matsuo, A., Karasawa, M., & Norasakkunkit, V. (2017, August). Can we “accurately” interpret immorality?: Cultural bases for shared representations of morality. One of the speakers in the symposium titled “Trends in the Study of Moral Judgments” at the 12th biennial Asian Association of Social Psychology Convention, Auckland, New Zealand.
20. Kaur R., and Sasahara, K. (2017, July). Moral Foundations in Online Conversations. The 3rd International Conference on Computational Social Science (IC2S2). Cologne, Germany.
21. Sasahara, K., Ciampaglia, G.L., Flammini, A., & Menczer, F. (2017b, July). Modeling Echo Chambers on Social Media. The 3rd International Conference on Computational Social Science (IC2S2). Cologne, Germany.

22. Karasawa, M., Suga, S., & Sato, A. (2017, July). The use of transitive verbs elicits the perception of blame and social power. Poster presented at the 18th General Meeting of the European Association of Social Psychology. Granada, Spain.
23. 鈴木敦命. (2017 年 6 月). 信頼性学習による顔の見えの変化　日本感情心理学会第 25 回大会, 同志社大学.
24. Suzuki, A., Ueno, M., Ishikawa, K., Kobayashi, A., Okubo, M., & Nakai, T. (2017, June). Brain activity in response to feedback on face-based trait inferences in older and younger adults (poster session). The 23rd Annual Meeting of the Organization for Human Brain Mapping, Vancouver, Canada.
25. Sasahara, K., Ciampaglia, G. L., Flammini, & A, Menczer, F. (2017a, June). Emergence of Echo Chamber Networks: The Effects of Social Media Mechanisms. The 10th International School and Conference on Network Science (NetSci 2017) Indiana, USA.
26. 笹原和俊, Ciampaglia, G. L., Flammini, A., & Menczer, F.　(2017 年 5 月). エコーチェンバーの生成ダイナミクス　人工知能学会第 31 回全国大会，ウインクあいち
27. Sasahara, K. (2017, May). Inevitability of Online Echo Chambers. ICWSM 2017 Workshop on Digital Misinformation. 招待講演　Montreal, Canada.
28. Tanaka, Y., & Karasawa, M. (2017, March). Is hurting a more vulnerable victim perceived to be more intentional and immoral?: the influence of perceived moral patiency of victims on moral judgements. Poster presented at International Convention of Psychological Science 2017, Vienna, Austria.
29. Hirozawa, P. Y., Karasawa, M., & Matsuo, A. (2017, March). Judgments of moral character for positive and negative intentions. Poster presented at International Convention of Psychological Science 2017, Vienna, Austria.
30. Matsuo, A., Karasawa, M., & Norasakkunkit, V. (2017, March). Why do people think of the situation as moral violation?: Perceptions of Shweder's "Big 3" morality in Japan and the U.S. Poster presented at International Convention of Psychological Science 2017, Vienna, Austria.
31. Matsuo, A., Karasawa, M., & Norasakkunkit, V. (2017, January). Perceptions of Shweder's "Big 3" Morality in Non-West: Characteristics of Moral Violation Situations in Japan. Poster presented at the annual Society for Personality and Social Psychology, San Antonio, USA.
32. ヒロザワ パウラ ユミ・唐沢穣・松尾 朗子 (2016 年 9 月) Judgments of moral character with positive and negative intentions　日本社会心理学会第 57 回大会，関西学院大学
33. 田中 友理・唐沢穣・宮本 聡介　(2016 年 9 月) ステレオタイプが情報の伝達されやすさに与える影響－言語的抽象度を用いたソーシャルメディア分析による検討－，日本社会心理学会第 57 回大会，関西学院大学
34. 松尾 朗子・唐沢穣・Norasakkunkit Vinai (2016 年 9 月) 日本における道徳違反状況の特徴と道徳観　日本社会心理学会第 57 回大会，関西学院大学
35. Matsuo, A., Karasawa, M., Norasakkunkit, V., Sasahara, K., & Kaur, R. (2016, August). Cultural Bases of Moral Ethics: Perceptions of Morality in Japan and in the United States. The 23rd International Association for Cross-Cultural Psychology Conference, Nagoya, Japan.
36. Tanaka, Y., Karasawa, M., & Miyamoto, S. (2016, July). The more stereotypic, the more Retweets: How linguistic abstractness and stereotypicality influence information transmission on Twitter. The 31st International Congress of Psychology, Yokohama, Japan.
37. Ryu, H., Hotta, M., Karasawa, M. (2016, July). The effect of expecting intergroup interaction on collective guilt. International Congress of Psychology. Yokohama, Japan.
38. Tanaka, Y., Miyamoto, S., & Karasawa, M. (2016, January). The Spread of Stereotypical Beliefs on Twitter: An Analysis of Linguistic Abstractness and Retweets. Poster presented at the 17th Annual Convention of the Society for Personality and Social Psychology. San Diego, CA, USA.
39. Karasawa, M., Ohji, A., & Tsukamoto, S. (2016, January). Blaming the bad intention of a group's wrongdoing: The role of affect and perceived collective agency. Poster presented at the 17th Annual Convention of the Society for Personality and Social Psychology. San Diego, CA, USA.

〔図書〕（計 2 件）
1. 唐沢穣・松村良之・奥田太郎（編著）(2018) 責任と法意識の人間科学　勁草書房　総：317 頁
2. 北村英哉・唐沢穣（編著）(2018)　偏見や差別はなぜ起こる？心理メカニズムの解明と現象の分析　ちとせプレス　総：290 頁

〔その他〕

ホームページ等
タイトル：J-MFD: Japanese Moral Foundations Dictionary
URL：https://github.com/soramame0518/j-mfd

６．研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：北村英哉
ローマ字氏名：KITAMURA, Hideya
所属研究機関名：東洋大学
部局名：社会学部
職名：教授
研究者番号（8 桁）：70234284

研究分担者氏名：　笹原和俊
ローマ字氏名：SASAHARA, Kazutoshi
所属研究機関名：名古屋大学
部局名：情報学研究科
職名：講師
研究者番号（8 桁）：60415172

研究分担者氏名：鈴木敦命
ローマ字氏名：SUZUKI, Atsunobu
所属研究機関名：東京大学
部局名：人文社会系研究科
職名：准教授
研究者番号（8 桁）：80547498

研究分担者氏名：日置孝一
ローマ字氏名：HIOKI, Koichi
所属研究機関名：神戸大学
部局名：経営学研究科
職名：講師
研究者番号（8 桁）：60509850

(2)研究協力者

研究協力者氏名：松尾朗子
ローマ字氏名：MATSUO, Akiko